

日本の音

OLJランゲージアカデミー 安 慶松（中国）

「キーキー、カラカラ…キーキー、カラカラ…」。日本がこういう音をしているように聞こえると、彼女が私に言った。

それはとてもとても寒い日だった。冬休みが始まる前の最後の授業日、学校が終わった私はすぐに駅へと向かい、その日のアルバイトの集合場所に急いだ。駅を降りて集合場所を探すこと10分、やっと集合場所であるバス停にたどり着いた。そこにはもう長蛇の列ができていて、パッと見たらほとんどの人が外国人で、都内屈指のオフィス街にしては異様な光景だった。出発時間になったら、どの送迎バスもパンパンで、乗っている人たちは皆黙って携帯をいじったり、目をつぶって仮眠をとったりしていた。乗客がこんなに多いとは思えないほどの静けさのせいで、私まで緊張してきた。そこに私がいたのには理由がある。当時、私はアルバイトで足に怪我をし、そのアルバイトを辞めて一時期静養していた。次の仕事が見つかるまで、クラスメートに紹介してもらった日雇いアルバイトで生活費を賄うつもりだった。

妙な緊張感に包まれながらも仕事場に着いた。ヘルメットと安全靴を着用し、担当者連れられて着いた先は宅配便の倉庫であった。仕事内容は極めて単純明快、荷物の仕分けだった。二人組でいくつかの番号を担当し、ベルトコンベアに流れてきた荷物を番号別に分けていけばいいのだ。

聞く分にはとても簡単な仕事だが、実際は想像していたのと全然違った。まず、荷物の流れてく

るスピードがとんでもなく速かった。どんなに頑張ってもそのスピードには追いつけないし、振り分けた荷物がどんどん溜まってきて置く場所もなくなるし、それでもベルトコンベアは容赦なく荷物を運んでくる。その焦りと絶望感は今でも鮮明に覚えている。世の中は正月間近、荷物はマグロや果物などの重い贈答品ばかり。一度休憩が明けたら、その後の5時間は1回も休憩を取れずにずっと作業続けた。そのせいで最後の3時間の記憶はぼぼなかった。手袋をしていても手は凍りついたように冷たく、マスクは息を吐くときにちょっと温かく感じるが、息を吸うときは倍に寒く感じる。腰も痛ければ、腕の力も出なくなつた。何かに寄りかからないと立つことさえできなかつた。1秒は1時間のように感じた。

何よりも苦痛だつたのは騒音であつた。荷物が床にぶつかる音、機械が運転している音、大声で指令を出す人の声、カートを動かすときのガシャガシャした音など、いろいろな音が混ざつていて、その中で一番私の精神を苦しめた音はベルトコンベアの音だつた。キーキー、カラカラ…キーキー、カラカラ…と、いつまでも続いていた。

ベルトコンベアの隣に立つて私は考えた。なぜ私は今ここにいるのか。なぜここは外国人ばかりなのか。

理由は簡単だ。日本語があまり通じない外国人労働者は、こういう語学力を求めない仕事にしかつけないのだ。私がかここにいるのはただ怪我^{けが}我^がをしてしまつて、運が悪いだけだ。でないと、既に日本語能力試験1級に合格した私はこういう日雇いアルバイトをするわけがない。

でもこの答えでいいのか？ 自分だけが良ければいいのか？

いや、良くない。外国人労働者たちがいないと成り立たないと言えるぐらいの現在の日本社会にもきつと良くない。きつい仕事は必ず誰かがやらないといけないのだが、もっと人間味があつて、

外国人に優しい仕事環境を作ることはできるはずだ。

グローバル化の流れは逆らえない。実際、日本政府は既に多文化共生社会の構築に努力を注いでいる。それは留学生である私だからこそ実感できることである。区役所に行けば、パンフレットはいろいろな言語のバージョンがある。病院に行けば、日本人と同じように国民健康保険が使える。でもやっぱりまだまだ足りない。

あの日、帰り道で、私と一緒に二人組を組んでいたベトナムの女の子がカタコトの日本語でこう言った。「キーキー、カラカラ…キーキー、カラカラ…。これが私の日本の音」。オフィス街の広い道で、私たちの歩いた歩道はアルバイトが終わった外国人たち、反対側の歩道にはスーツを着ている日本のサラリーマンたち。距離が近くても、お互いに違う世界の人に見えた。そっちの世界はもっといろんな音がしているのだろう。そう思いながら、私は大学院へ進学し、日本の留学生問題について研究することを目標とした。2020年はちょうど私が大学院を卒業する年である。その時になつたら、私はきつと日本のどこかで、日本にいる外国人たちにもっといろんな音を聞かせるために一生懸命に努力しているのだろう。

